

地域に開く高齢者施設の在り方

パートナー名 特別養護老人ホーム 栗林荘

19班

コミュニティデザイン学科
建築都市デザイン学科
社会基盤デザイン学科
グループ指導教員

石井優衣 大原日和
祐川和奏 鎌塚世成 小島稔也 細谷亮輔
大野海向 古賀誉章



01 背景

小山市にある「特別養護老人ホーム栗林荘」は、かつて暗く閉鎖的な施設だった。そのイメージを払拭したいという思いから、誰もが集い、つながり合える、「地域の一部」となるような新しい私たちの高齢者施設を目指し、大規模改修工事が行われた。スケートボードパークや子どもの遊び場シェアキッチン、パン屋など、地域住民が誰でも出入りし、利用できる場所がある。

昨年度の演習では、地域に知ってもらうための納涼祭を復活させた。『小さなイベントや日常的な地域の交流の場を行うことで「地域に開かれた施設」を作っていく』という提案がされた。

02 目的

今年度は改修工事が完了し、11月にオープニングイベントが予定されていた。オープニングイベントを通して、
・地域の方々に新しく生まれ変わった栗林荘を知ってもらう。
・利用者様と地域の方々の交流の機会をつくる。
→オープニングイベント以降も日常的に交流が生まれるような仕掛けを考える。

03 実践

訪問回数: 21回(うち、宿泊回数2回)
校内作業: 11回 合計: 32回

学生が発案・製作・実施

①駄菓子屋の発足



目的: 交流のきっかけづくり
方法: 屋台製作、イベント時の運営
工夫: 誰もが使いやすいように可動式の棚や車いすに合わせた高さにした。移動して日常的に利用者様が子どもたちに販売し交流することができる。

②インタビューの実施



目的: 実際の声を届ける
方法: インタビュー、パンフレットの作成
工夫: 会話の延長で人柄の表れるお話を伺った。どのような方が利用しているのかを知ってもらい、安心感と興味を持ってもらう。

栗林荘発案を発展させる

③珈琲屋ひろのサポート



目的: 利用者様の「やりたい」をかなえる
方法: 感想の共有、販売のお手伝い
工夫: 利用者様の体調やできることに合わせて、サポートした。利用者様が感謝される側として、コーヒーを淹れる。

④手芸部の参加



目的: 「地域に開く」ひとつの方法を示す
方法: 一緒にカラベハリエを作る
工夫: 「カラベ」は共に取り組むことで正解がない「個性」を、体感できる。駄菓子屋台名称募集カードに活用された。

⑤遊び場の使い方を示す



▲ボルダリングホルドの配置



▲地域の子どもたちとバスケット



▲スケートパークとラブちゃん

オープニングイベント 2025年11月8日(土)



⑥クイズラリーの企画・実施

目的: 施設の中を知ってもらう
方法: 栗林荘に関する問題を考案
工夫: 栗林荘の全エリアを歩いて見てもらい、アンケートの回答や利用者様との交流が増えるよう、分散して問題を配置した。



左上から
イベント用パンフレット
テレビ小山 取材映像
栗林荘 Instagram
左下から
当日の利用者様の様子
受付の様子
駄菓子屋の様子

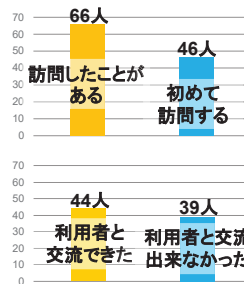


04 調査結果

調査の目的:

オープニングイベントの実施によって栗林荘がどのように利用されるようになったかを確認し、利用者様と地域住民の交流が生まれる効果的な実践を考えるため。

●アンケート調査(オープニングイベント当日) n=112



Q. 栗林荘に訪問したことがあるか

・訪問したことがある人が58.9%
→栗林荘が地域の人にある程度認知されている。
・訪問が初めての人が41.1%
→オープニングイベントは栗林荘の来場者増加に効果的。広報活動も影響している。

Q. 利用者と交流することが出来たか

・交流できた人が53%、交流できなかった人が47%だった。
→イベントとしてある程度の成果はあったものの交流を促進する仕組み作りの改善が必要。

自由回答欄には、栗林荘でイベントをしてみたいとの声や、ボランティア活動をしたいという声もあった。

●オープニングイベント当日の様子(来場者数 346人)

駄菓子屋	珈琲屋ひろ
売り上げ 28,840円	販売数
購入者数 224人	コーヒー 110杯
	コースター 2個
	コーヒー豆 4袋

【駄菓子屋】

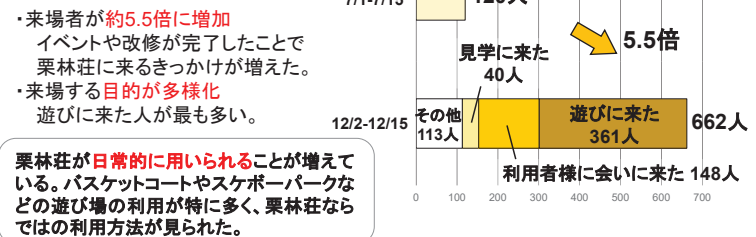
来場者の半数以上が駄菓子屋を購入。幅広い年代の方々に親しまれた。

【珈琲屋ひろ】

利用者様が設定した目標100杯を達成。

●来場者数調査(オープニングイベント前、後)

スタッフの方や来場者の負担に配慮し、主な出入りに2週間設置。



栗林荘が日常的に用いられることが増えている。バスケットコートやスケートパークなどの遊び場の利用が特に多く、栗林荘ならではの利用方法が見られた。

05 提案

駄菓子屋の日常的な運営

駄菓子屋を日常的に運営することで、すでに施設を訪れている地域の子どもと利用者様が関わるきっかけが生まれる。駄菓子屋を介したやりとりにより、世代を超えた自然な会話や交流が促されることが期待される。



- ・イベント後も日常的に遊び場に訪れる子どもの姿が多くみられ、駄菓子屋への継続的な需要があると考えられる。
- ・施設内を巡回したところ、利用者様が昔を懐かしみ楽しむ様子がみられた。

◀ 駄菓子屋を選ぶ利用者様

現状: 宇大生がいない状況で日常的に運営していくための仕組みがない。

今後の展望:

- ・マルシェに出店した際に、小学生が運営を手伝う姿がみられた。子どもが運営に関わる仕組みを検討する。
 - ・他施設の事例「施設内通貨」を参考に、利用者様が駄菓子屋を購入しやすい仕組みを検討する。
- ⇒演習終了後も学生有志で運営体制の検討を継続していく。



▲接客に挑戦する小学生